四国歯誌　27（1）：49 ～ 53，2014

## 活動報告

# ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学への短期留学における活動報告

垣内　菜摘[1)]，湊　　晶帆[1)]，岡澤　悠衣[1)]，大津　朱里[1)]，
藤原奈津美[2)]，日野出大輔[3)]，伊賀　弘起[4)]

キーワード：フィンランド，短期留学，歯科衛生士

# A Report of Activity in a Short-Term Study Abroad to Helsinki Metropolia University of Applied Sciences

Natsumi KAKIUCHI[1)], Akiho MINATO[1)], Yui OKAZAWA[1)], Akari OTSU[1)],
Natsumi FUJIWARA[2)], Daisuke HINODE[3)], Hiroki IGA[4)]

Abstract：We visited Helsinki Metropolia University of Applied Sciences from August 14th to 22nd as a short-term study abroad supported by Japan Student Services Organization (JASSO). We participated in the basic and clinical training of the oral hygiene course. Furthermore, we also visited the institution for elderly in Espoo and the orthopedic hospital in Helsinki. We reported the outline of the study abroad here.

## はじめに

フィンランドは，国土338,145km$^2$，人口545万人と日本の国土とほぼ同じ面積を有し，人口は日本の4.2％ほどの北ヨーロッパに位置する国である。この国の医療は，1972年から一次医療法（Primary Health Care Act）で市町村に市民の健康増進，病気の予防，医療，リハビリテーションのサービスを供給するよう義務付けられており，非常に早くからプライマリ・ケアを行う体制を築いている。また，北欧における社会サービス（社会福祉のサービス）は全ての国民が受けることができ，「個人が障害・疾病に起因する不自由さにもかかわらず，自立して日常生活を送れるように支援すること」という考えが浸透している。このように保健医療や社会福祉サービスが充実しているフィンランドは，歯科衛生士および社会福祉士を目指す私たちにとって学ぶべきものが多い福祉の先進国である。

本学部は平成22年８月にヘルシンキメトロポリア応用科学大学と部局間協定締結しており，これまでにその協定に基づいて教員や交換留学生の相互派遣および共同研究を行ってきた。今回の留学は，共同研究「口腔保健学を基軸とした国際的社会福祉教育プログラムの開発」の一環として実施されたもので，平成25年８月14日か

[1)] 徳島大学歯学部口腔保健学科４年
[2)] 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健支援学分野
[3)] 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健衛生学分野
[4)] 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健教育学分野
[1)] Fourth grade undergraduate student, School of Oral Health and Welfare, Faculty of Dentistry, The University of Tokushima
[2)] Department of Oral Health Care Promotion, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School
[3)] Department of Hygiene and Oral Health Science, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School
[4)] Department of Oral Health Care Education, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School

ら22日までヘルシンキに滞在し，同大学での歯科衛生士教育を受け，さらには高齢者福祉施設を視察する機会を得たのでその概要を報告する（図1）。

## 基礎実習への参加

メトロポリア応用科学大学の口腔衛生学科は3.5年制で，今回は2年生の学生達が受ける基礎実習に2日間参加した。

初日は実習前に，私たちの自己紹介も兼ねて「日本の文化」と「徳島大学歯学部口腔保健学科の教育課程」を紹介した（図2）。「日本の文化」に関しては，有名な観光地，文化遺産，日本の四季について解説し，さらに，地元である徳島の観光地や阿波踊りの紹介も取り入れ，実際に有名連が踊っている動画も上映した。また「徳島大学歯学部口腔保健学科の教育課程」に関しては，私たちが受講している教育カリキュラム，学外学習，実習実技試験（OSCE）の概要などを紹介した。基礎実習の内容はファントムでのスケーリング実習で，事前に歯頸部に塗っておいたマニキュアをスケーラーで除去するという私たちが日本で実施した内容とほぼ同じ実習内容であった（図3）。フィンランドの学生に「日本でもこういった実習はあるのか」や「実際に少しやってみるか」と聞かれ，慣れない英語と身振り手振りを用いてコミュニケーションを行った。違う国で同じ専門分野を学ぶ学生との会話は楽しく刺激的だった。また，実習内容自体は似通っていたものの，使用しているスケーラーの形状が異なっており，実際に持ってみると手によくなじみ，グローブを装着した手でもしっかりと把持できると感じた。

## 臨床実習への参加

メトロポリア応用科学大学では，4年次学生が臨床実習を行っており，私たちはその補助として実習に参加した。学生は，自分の担当する患者の歯科用ユニットへの導入，医療面接，PCR測定やプロービング等の口腔内診査，口腔衛生指導，スケーリング，歯面研磨等の歯科予防処置，次回の来院予約までの全ての流れを学生1人で行っていた（図4）。受診している患者は，見学している私たちを快く受け入れ，さらに公用語であるフィンランド語ではなく英語を使って私たちに話しかけてくれたことにとても驚いた。私たちは，日本でもまだ臨床実習現場を体験したことがなく，とても緊張していたため，患者が気さくに声をかけてくれたことはとても嬉しく感じ，安心感も覚えた。口腔衛生学科の学生の臨床実習現場は，ヘルシンキ大学歯学部附属病院内の1フロアにあり，そのフロア全体が歯科衛生士が行う予防処置専用の環境が整備されていた。チェアは全部で21台あり，ここで受診する患者の負担金は無料とのことで，患者が学生に対しおおらかで協力的である一因なのではないかと感じた。

図1　ヘルシンキメトロポリア応用科学大学

図2　本学科についての発表

図3　ファントムでのスケーリング実習風景

この病院で使用されていたチェアは，術者にとって疲れにくい設計になっており，座ると腹部に力が入り姿勢が伸びた状態で処置が行えるようになっていた。ブラケットテーブルも歯科衛生士が使いやすいように，患者の身体の上に位置しており，さらにエアタービンは装備されていなかったことから，予防処置のみを行う歯科衛生士用に作られたユニットであると思われる（図5）。

このような診療室の環境から，フィンランドでの歯科衛生士という職業の立場は，患者への歯科予防処置の提供に一貫していて，独立していることが理解できた。また，使用されていたバキュームはディスポーザブルであることや，処置中は術者も患者もゴーグルを着用することが義務づけられていることから，感染対策においては日本に比べ細やかな配慮がなされていると感じた。しかしながら，スケーリングや歯面研磨に関する技術や術中の患者に対する配慮に関しては，フィンランドに比べ日本の歯科衛生士教育の方が洗練されていると思われる。日本では患者の頭の角度から術者の位置，スケーラーの持ち方やラバーカップの動かし方まで指導を受けるためである。フィンランドの歯科衛生士臨床実習へ参加したことにより，日本とフィンランドの歯科衛生士教育がどのように異なるのかということが実感できた。フィンランドの歯科衛生士教育に対して見習うべき点や，今まで教わってきた日本の歯科衛生士教育を大切にしなくてはいけない点を自分たちの肌で確認することができた。

## フィンランドの施設の視察研修について

### 1）高齢者施設 Kauklahden elä ja asu – seniorikeskus の視察

8月15日にエスポー市内の高齢者施設 Kauklahden elä ja asu-seniorikeskus を訪れた（図6）。そこは2012年5月に開設された新しい施設であり，建物は4階建てで，1階はデイサービス，2～4階は入所施設で構成されていた。

1階のデイサービスは毎日100人ほどの高齢者が利用しており，食事・フィットネスジム・手芸ができるような施設が整備されていた。デイサービスは，セラピードッグを交えた交流などの様々な企画を行って通年快適に利用できるように工夫している。なかでも印象的だったのはフィットネスジムの機械で，個人パスワードを入力するとその人専用にプログラミングされたメニューが自動で開始されていた。プログラムを作るためのアセスメントは，施設の理学療法士が行うというシステムであるとのことだった。

2～4階は入所サービスを行っていたが，エスポー市では「なるべく自分の余生を自宅で過ごす」という基本的概念があり，現在17人がこの施設で余生を過ごしており，その他の人は一時的な仮住まいとのことだった。必要な家賃はおよそ500～600ユーロで，さらにその人に必要な医療などのサービス料金が追加される。スタッフは，1フロアに看護師8名，准看護師32名，介護士8名，施設清掃員10名，事務4名で入所者の支援に当たっている。医師は週1回と緊急時に訪れているが，口腔内に問題点がある場合はエスポー市の保健センターもしくは開業歯科医に連絡の上，外来受診するとのことであった。高齢者施設と歯科医療がどのようにして連携しているのかは今回の視察研修では明らかにできなかったので，今後の交流での課題としたい。

図4　フィンランド学生の臨床実習風景

図5　臨床実習で使用されていた歯科用ユニット

図6　エスポー市の高齢者施設 Kauklahden elä ja asu-seniorikeskus

3，4階は各階に24人の高齢者が入所でき，8部屋ずつで区切られている。8部屋ごと，また1フロアに1つリビングのような共有スペースが設けられており，ゆったりと安心して生活できるスペースが整備されていた。なるべく施設ではなく家庭の雰囲気を出すように，家具

図7　快適な生活を営んでいた施設利用者

図8　患者に安心感を与えるよう配慮された病室

等は利用者の持ち込みが基本となっている。一人の利用者に尋ねると，「家と変わらない生活ができてとても幸せだ」とおっしゃっており，ゆったりと満足した生活が送れている様子が伝わってきた（図7）。施設全体が明るく開放的で，利用者からは笑顔があふれており，私たちも将来ここに住みたいと思えるような施設であった。このような利用者の笑顔は，個人の生活を大切にしているからこそ見られるものであり，日本の施設でも見習うべき点であると考える。また，フィンランドの高齢者施設では国民の生活に欠かせないサウナが設置されていると聞き，その国の文化や慣習を大切にするという点では日本と共通するものがあると思われた。なお，フィンランドにおいても高齢者の増加は著しく，エスポー市では，今後も新しい高齢者施設の開設を予定しているとのことであった。

2）私立病院 Orton Orthopedic Hospital の視察

8月16日に私立病院 Orton Orthopedic Hospital を訪問した。この病院は約70年の歴史のある病院で，年間2000件もの手術を行う整形外科専門の病院である。病院自体は広大であるものの，ベッド数は36床と非常に少ない。これは，この病院は月曜・火曜に手術を受けた患者が金曜に退院するというように，綿密にシステム化されているためであり，患者の入院滞在日数を短縮し，かつ医療費の削減に貢献できていることを知った。そのような話を聞き，私たちは国民の医療費の負担にまで視点を向けることが重要であることを実感した。また，手術前の感染管理の1つとして，地域の口腔保健センターと連携して口腔ケアを行っており，歯科からの証明書がないと手術しないシステムを徹底していることを知り，日本での周術期口腔機能管理と類似していると感じたと同時に，フィンランドの医療のなかで口腔ケアの重要性が根付いていることを実感した。このようなことを聞いて，私たちは口腔ケアの大切さを改めて学ぶことができた。

また，訪問した病院では環境に配慮したいくつかの工夫がなされていた（図8）。その1つに，入院患者の病室には非常に大きい窓が設置されていたことである。案内してくださった看護師によると，病室の窓を広くとり窓の高さを低く設計することで，ベッドに寝ていても外の景色が一望できるようにしてあるとのことだった。2つ目は，ベッドとカーテンが薄いグリーンで統一されていたことであり，患者が落ち着いて療養できるよう配色にまで気を遣っていた。さらに3つ目は，病院内には絵画や彫刻，オブジェなどの芸術作品が多く配置されていたことである（図9）。これは，「患者さんが芸術作品に触れるのはメンタル面でも良い効果がある」というエビデンスをもとに展示しているそうであり，病気に関することだけでなく，患者が置かれている環境にも配慮されていることがよく理解できた。

## 最　後　に

今回の短期留学で最も印象深かった点は，フィンランドの学生の積極的な実習態度と英語による高いコミュニケーション能力である。基礎実習中はフィンランドの学生の発言が多く，積極的に実習に参加している様子が伝わってきた。また，臨床実習でも毅然とした態度で患者に接している姿や流暢に英語を話す姿が印象的であった。

海外に行くという経験が少なかったため，渡航前から英語でコミュニケーションをとるということに対して大きな不安があった。しかしながら，フィンランド学生への発表準備を渡航前から入念にしたことで，発表に対して高い評価を得ることができた。不安で困難だと思われた事も，目的や目標に向けて懸命に努力することは自分達の成長につながるのだということを経験することができ，チャレンジすることの大切さを改めて知ることができた。今回のフィンランドの短期留学での貴重な経験を活かして，今後の大学生活をさらに充実させ，この国際交流の継続に貢献していきたいと考えている。

図 9　Orton Orthopedic Hospital 内に点在していたオブジェ

## 謝　　辞

本短期留学にあたって，私たちを快く受け入れ基礎実習・臨床実習を指導いただきましたヘルシンキメトロポリア応用科学大学保健看護学部口腔衛生学科の諸先生方に心より御礼申し上げます。また，フィンランドでの発表の準備に多大なご指導いただきました徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 Marianito Maningo Rodis Omar 先生に深謝いたします。

なお，本事業は日本学生支援機構（JASSO），四国歯学会，文部科学省特別経費（組織改革促進分）概算「ICT を活用した地域実践型口腔保健教育による高度専門職業人の育成」の支援を得ました。